

平成 4 年 5 月 22 日	植 防 情 報	発 表	栃 木 県 病 害 虫 防 除 所
------------------------	---------	-----	-------------------

病 害 虫 発 生 予 察 特 殊 報 第 1 号

病 害 虫 名 : オオムギ縞萎縮病 (B a Y M V) III 型系統

1 . 発 生 確 認 ま で の 経 過

平成 4 年 4 月 16 日 に、下都賀郡壬生町のほ場から専門技術員を通じ、モザイク症状の発生した二条大麦「ミサトゴールド」が持ち込まれた。

農林水産省農業研究センターウイルス病防除研究室長日比野啓行氏に検定を依頼した結果、オオムギ縞萎縮病と同定された。「ミサトゴールド」に発病が認められたことから、本県では未確認の III 型系統と判断された。

III 型系統は、昭和 60 年に茨城県で発生が確認され、現在までに、大分県、岡山県などにおいても「ミサトゴールド」に罹病が認められている。

なお、茨城県では、2 市町でのみ発生が見られているが、昭和 62 年以降、他の地域での発生は確認されていない。

2 . 発 生 状 況

現在、下都賀郡壬生町の 1 地区 (約 50 a) で発生が確認されているが、その他の地域では確認されていない。また、発病程度は軽く、葉にモザイク症状が見られるものの、株の萎縮などは見られず、生育は健全株とほとんど変わらない。

3 . ウ イ ル ス の 系 統

オオムギ縞萎縮病のウイルスにはいくつかの系統があり、罹病するオオムギの品種間差の関係で大きく 3 つの系統に分けられる。III 型系統は、ミサトゴールドを含め、県内で作付されているすべての品種で発病する。

〔参考〕 汁液接種試験による B a Y M V 系統分類 (柏崎ら、1989)

品 種	ウイルスの系統		
	I	II	III
ニューゴールドン	+	+	+
あかぎ二条	+	+	+
はるな二条	+	-	+
あまぎ二条	+	-	+
ヤシオゴールドン	+	-	+
ミサトゴールドン	-	-	+
ミカモゴールドン	-	-	+
イシュクシラズ	-	-	-

注 1) オオムギ縞萎縮病とコムギ縞萎縮病は別のウイルスによって起こる病気で、相互に感染しない。

注 2) なす二条については調査データがない。

4 . 発生生態

1) 感 染

ウイルスを保毒した土壌中の *Polymyxa* という菌がムギの根に寄生することによって感染が起こる。

感染は、は種後10日目から認められ、30～40日で最高に達する。は種後30～40日の感染時期に降水量が多く気温が高いほど感染率は高く、さらに、冬期間に気温の低い年には発病程度が高まる。

2) 病 徴

早春から茎葉が黄化し、黄緑色の細長いかすり状の斑点が葉脈に並行して葉と葉鞘に現れる。新葉はやや細めで内側に巻き、淡黄緑色の退色斑を生じ、次の葉が出るころにモザイク症状になる。

あまぎ二条、はるな二条等では、病株は分けつが減り、草丈が低くなるが、萎縮の程度は著しいものではない。また、根の伸長が悪く、新根の発生が顕著に減る。下葉は黄変して葉先から淡褐色になり、次第に枯れる。

ミサトゴールドンの場合は、あまぎ二条などに比べ病徴の現れる時期は遅く、葉にモザイク症状は認められるものの、程度は軽微である。

3) 被 害

あまぎ二条などでは、症状が激しい場合、茎立ち後に黄枯れ症状を呈し枯死する。気温の上昇とともに病徴が回復した株では分けつが減るので、穂数が著しく減少する。根の伸長や新根の発生が劣るため、草丈が低く、出穂が不揃いとなり、不稔粒が多くなる。

ミサトゴールドンはIII型系統に罹病するものの、被害程度の高いあまぎ二条などに比べて病徴は軽く、生育、収量への影響はほとんど認められない。しかし、連作によって発病程度は高くなる。

5. 防除対策

- 1) 発生がみられたほ場から他のほ場への、土の移動や拡散を避ける。特に、耕うん機等を共同で使用する場合は注意する。
- 2) オオムギを連作しない。
- 3) コムギなどに転換する。
- 4) 排水をよくする。特に、湿田及び基盤整備を行ったほ場では、暗きょ排水等の積極的な対策を行う。
- 5) 暖秋が予想される場合は、は種時期をは種適期の晩限まで遅らせる。
- 6) ダコソイルを10 a 当たり播溝施用では20kg、全面施用では30kg施用する。